宗像

毎月一日発行
定価一年 送共250円
発行所
宗像大社社務所
福岡県宗像郡玄海町田島
電話 神湊 26の甲

宗像大社御用達
神輿
祭具
装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
振替口座京都一五八九一番

宗像放生会賑わう

古来「宗像放生会」または「むなかたまつり」といわれて郡民に親しまれている秋の大祭が、今年も十月一日から三日迄賑やかに行われた。

天候にも恵まれ、露店の数も例年に劣らず、「宗像市」「田島市」「放生市」といわれる「市」も身動き出来ない程の雑踏に明け暮れた。前日の朝日新聞、西日本新聞にも「まよひ子たづね所」や「むなかた放生会」の記事が掲載せられ、準備は上々、祭典及び神賑行事とも概して良好であった。特に今年から氏子会奉幣の行事が折り込まれ、会長麦野時雄氏が斎服姿に威儀を正し、宮司の祝詞に引き続いて祝詞を奏上した時には祭典気分は最高潮に達した。

玉串奉奠には、全国宗像会を代表して門司の船越氏が拝礼された各地宗像会からの団体参拝も相次ぎ、八幡、門司、中間、飯塚等、家族等を混えた姿が見えて、レクリエーション気分もここに至って最高と思われた。

神門前の露店には何百年も前から並んだ「生姜市」「栗市」「柿市」などの山の幸が昔懐しい香りを漂わせ、瀬戸物、玩具其の他が所狭いまでにひしめいて不夜城を現出した。見世物のオートバイ、猿の曲芸、くぐつ師の小屋掛けの前には遠近から来た子供たちが群がっていた。

一日の流鏑馬には朝日、西日本の各新聞社、KBC、NHKの写真班などが取材に来た。翌日の新聞紙上には矢を番えた馬上の雄姿が紹介されていた。

二日目の神賑行事として郡内中学校の角力大会が開かれた。これが中学生かと思われるような大きな身体で真摯敢斗する姿に、見物席から盛んな拍手が起っていた。

優勝は津屋崎中学校Aチーム、二位は福間中学校Aチーム、三位は玄海中学、津屋崎中学のBチーム。個人優勝は一年では寺元敏雄（福間）二年占部研二（津屋崎）三年篠崎光夫（津屋崎）。参加チーム八チーム、人員九十六名で盛会であった。賞品は、中学生らしく優勝旗、楯（以上寄贈出光佐三氏）などの外三浦文具店（津屋崎）寄贈による学用品などが主で同じく学用品が追加寄贈（博多の麻生藤市氏関係―麻生氏は久保宮司相談役）され盛沢山な賞品が参加者たちを喜ばせた。賞品授与式には当社小野権宮司が出席「皆さんの真摯敢斗を謝する、その真面目な態度で勉強もし、人生の荒波を越えて行って貰いたい」旨の挨拶があった。

三日間の参拝者数は殆んど十万人を越えたであろう。かくて宗像郡が挙って祝う最大の行事が今年も盛大に終了したのである。

一日と三日に行われた風俗舞、浦安舞、二日の翁舞関係者の御苦労もさることながら、各役割によって分掌を定められた総代さん方の活躍の姿が甲斐々々しく参拝者の目に映った。

宗像警察署員の巡視取締りも署長さん以下一体となって熱心に行われ、地元消防団員の深夜にわたる警戒など、その他大勢の方々の御加勢によって、文字通りの「万民豊楽」の祭典が無事終了したことを御礼申し上げる次第である。

門司市の永島哲夫氏から思い出懐しい一首が寄せられたのでここに御紹介申し上げる。

○五十年前の放生会とかわりなく新生姜並ぶ大前に佇つ。

論説
負ける相撲

勝負のあるものは勝たねばならない。野球相撲が広い範囲の人気を集めているが、野球は九つの点で勝負を決めているし多数の人の心理と技量が瞬間のポイントとなるのに比して、相撲は只一人の手と足に勝負のポイントがある。

大関横綱と言えば人気の頂点にある。まことに華やかだ。最初から大関横綱になった者はない。所謂フンドシカツギのザンギリ頭から先輩力士の厳しい指導を受けて昇進する。実力の世界とはまさに自己の力のみに頼る苦悩の世界である。

錬磨を積んで輝かしい成績を挙げて番付のめざましい昇進のある力士があれば、必ず番付の降る力士がなければならない。勝ち進む力士にも勿論土俵の苦悩はある。然し体力と技能が漸次充実して昇進し、世上にもてはやされる時期は希望と自信に充ちた嬉しい時代である。これは暫らくおく。負け越して番付を降される力士の場合を考えて何等かの処世訓を学びたい。

勝つ相撲は誰でも取りたい。相手が強くて到底勝味のないことを知る勝負は気の進まないのが人情だ。然し取らねばならない。勝負を決するを興味の焦点として、多数の観衆がこれを楽しむ以上、これを身上として立っている力士は敢えて見てもらわねばならない。数萬の観衆注視の中に裸身一擲、これは偉大な修練である。淡々として仕切り直し、その苦悩を払わんとする心中の戦いは察するに餘りあるもの。こゝで考えられるのは土俵の力士の態度に、白星をつかむために勝ちたい一心を表現している者と、軍配の結果を越えて相撲とりの本領に生きんとする者との大いなる軒輊を見つける。

白星とりでなく真の相撲とりは番付の下りつゝある老雄に、感一入。老雄は人気の華やかさを失った下り坂を歩んでいる。勝負を越えて堂々自己の技能体力の最善を発揮する心情は、土俵の上に少しも汚なさがない。素人目にもその淡々たる心境が窺える。こゝに老雄の負け相撲にも美しいものを感じる。

下り坂の老雄の土俵姿を讃えたい。人間力士の負ける一瞬に、力士として一個の人間としての大いなる心の修練を見出して、まことに感無量。

所詮人間は如何なる舞台にも、最高者の位置をいつまでも持続出来るものではない。上る者に必ず下る時のあることは相撲道だけでなく、あらゆる場合にこれが云える。体力も老いてゆく、智能も技量も己を越える新しい力が追って来る。このあせりを捨て苦悩を制するものは、自分自身の精神の鍛練以外にない。下り坂に屈しない然も平常心を失うまいとする精神の鍛練は言語の外にある。

一道に秀でる者の心構えは名声ではない。むしろ名声を捨てることに一道の達人たる素地がある。科学と云う、これも又名声を考慮する科学者に偉大なる科学は生れない。相撲と科学、あまりにも変哲の多い話ではないかといぶかる人もあろう。だが人の生きる世の方程式は簡単な中学生の方程式と異ることはない。

さて話を土俵に返して老雄の仕切りを見直そう。勝負の結果は予想されないが、老雄が負けるだろう。老雄よ負けろ、負けて人間力士の黒星を積み重ね、人間的修練に白星を加えてゆけ。

男子功を成す背後に必ず優れた女性がある。しかし麒麟も老ゆれば何とやら、曽ては華やかな人生舞台の脚光を浴びた偉丈夫も、何時の日か必ず没落の末路が訪れるその時に共に泣いてくれる女房があればそれでよい。やがて清閑な余生の心境を楽しむことが出来れば正に「高砂の尉と姥」が出現する。人生とは負ける相撲と見付けたり。

第七回宗像大社献詠歌会詠草
36、10、8於社務所（詠草到着順）

宗像　中村幸
○我の背をかすめてゆきし学童の自転車危ふし佇ちて見送る

神湊　隣船俊
○千早ぶる辺津の宮居やおごそかに神代の事のしのばるゝ哉

香椎　織田橡雨
○葬草を採る日うとみて此の秋もほまちおくれし心さびしも

福間　井原元彦
○ほじくれど耳垢の出ぬ物足らん気持に似たる我日の暮し

勝浦　永島八重
○御神幸稲田にゆれて今日ひと日村の若者大名となる

田島　滝口主米蔵
○ふるさとの運動会の幼ならの歓声きこゆこもりゐてきく

田島　久保輝雄
○雨風のめぐみ尊し寿がむ神のまにまに稲はみのりて

田島　神戸幸夫
○あきふかみのべのいなほにかぜゆれてむしのねほそくゆふぐれむとす

津屋崎　麦野時雄
○挿木せるくちなしの芽の伸びゆくを朝夕見守るに何か蝕ばむ

勝浦　永島文子
○こくうすく土手の曼珠沙華咲きにけり祭太鼓の穂波渡る日

熊本　吉田寧雄
○台風の被害としどし来て襲ふ日本の秋の宿命として

沖島　前田裔之助
○百雷の轟く音か颱風の波は激しく小屋島を越す

勝浦　永島計七
○秋晴れの野道を行けば燃ゆるがに曼珠沙華咲けり今日彼岸なり

戸畑　山磨昌子
○遠雷のしきりに鳴りて黒き雲嶺をおほひて風起ち初めぬ

吉武　原田リノ
○内科より外科に廻されし不安感病む娘に添ひて娘よりも疲れつ

深田　中野節子
○休み終え上阪する子見送りて佇む路傍に残暑きびしく

戸畑　田中ハツセ
○ふみ台に乗りてダイヤル廻す子のあかずたづねる番号の数

遠賀内浦　長畑房江
○おびただしき寝汗にめざめ見し窓の星の深さに秋とし思ふ

吉武　立石昇
○待ち詫びし雨の降り来てひさびさに机に凭りて心和みぬ

香椎　桜井秀
○夏の宵の憂鬱を野にさらしつゝ残暑の今日も波瀾なくて逝く

香椎　桜井ツ子
○北とほく颱風は過ぎぬ秋となりしひかりの中に昼を鳴く虫

武本　福原正喜
○秋の日にひたすら花の散りいそぐ実らんとする紫蘇のひと叢

田島　宇都宮弴
○あつかりし放生会まつり済みし今日朝より清めの時雨降りしく

吉武　立石ろせの
○北嶺よりながむる屋島の古戦場塩田となりかきも養殖す

田島　難波江通泰
○かき曇りにはかに膚の冷えゆきて我が行く道に時雨降り来る

田島　小野迪夫
○御垣内のみどり濃き大きしづもりの其処ゆまつりの歌垣ひゞく

田島　三苫重格
○落葉してからたちの枝はきはだてりはざまなる実の護りせむがに

門司　永島哲夫
○五十年前の放生会とかわりなく新生姜並ぶ大前に佇つ

阿蒙少言

列車の洗面所早朝一刻の風景、若い婦人がコンパクトで鼻を敲いている、お気の毒ながら顔面の諸道具の配合はあまり上等に出来てはいない、でも丹念に且つ傍若無人にお化粧がつゞく、美人になることの難しさを鏡が語っていた●七万五千噸の油槽船に乗った、巨大な浮城という言葉がピッタリあてはまる感じ、その船長が少しもエラク見えない淡々たる平凡人「こんな大船を動かす船長は堂々あたりを払う人かと思ったが」と若い人が言う「あれがホンモノの船長だ」はためく日章旗が重責を負って遠洋を行く船長を祝福している●愚妻豚児茅屋など一連の謙譲の用語があったがこの頃はあまり見聞しない、人権尊重男女同権がこれを抹殺したのだろう。但し宿六だけは尚当分保存の意義がある●或る結婚の披露宴「お母さんを大切に」と述べたところ「親戚も大切にしなければならぬ」と軽い反撃をうけた、親戚は大切にしなくてもよい●秀才と賞め才媛と讃えて仲人が新郎新婦を紹介する、祈れども願えども幸薄き人の世の悲しみを味ってきた仲人の演出を華やかな場面に噛みしめてみる●知人が難関といわれる東大の審査にパスして文学博士を得た、酒も煙草もない、上野の花もいらなければ銀座のネオンもいらない、学問即人生の研究生活がこの人の生きている意義だろう、学位の栄誉は当然のことだがその功績の半分は奥さんにある、名声の背後には学界政界芸術界を問わず常に名なき母か妻の偉大なる光がある、先ず学位のお礼は奥さんに●なぜ神サマを拝むのかと問う、なぜ神様を拝めないのかと答える、庭の一隅に松虫がさゝやく、神様になるような人間になれと。（白雲）

上八（こうじょう）の金控碓（かねひきうす）

宗像大社拝殿に向って左側に白壁の神庫がある。その神庫のすぐ右前の地面に高さ約四十糎、径約六十糎の「金控碓」のあるのに気付いている人は、そう沢山はいないと思う。何か石の台だろうぐらいに思って見過しているかもしれないが、実はこの石こそ、上八の金控碓なのである。

上八という所は宗像四塚連山中の北端に位する湯川山の西北麓のあたりに当る。このあたりの海岸には古代の先住者の住居趾、墳墓貝塚などがあり、今でも石器、土器類、獣骨などが発見される。この地続きの岬が鐘岬である。万葉集には「金之御崎」と見えている往古この土地から金を産出したという云い伝えがあって或いは金の御崎という文字を使用したものかもしれない。

金を産出したといういわれは偶然ではなかった。いつの頃か昔産金したという記録と、江戸時代末期の頃に金鉱を再開したという記録がある。宗像郡誌を見てみると筑前国続風土記拾遺の「上八村」のところに

昔此山中にて銅を堀し事有。銅多からすして幾程なく止みたり今猶鉱穴弐拾七八程あり。享保二年三月巡見使下向有し時、銅山の事聞伝給へるよしにて、此所にも立寄給へる事有。其時は堂ノ尾と云所にて、これを蹈鞴にかけしといふ。銅控碓といふもの、山中所々に残れり。

また、福岡県地理全誌の「上八村」のところには

金山址　村ノ東南ニ町許ニアリ昔此山中ニテ、金ヲ堀タリシカ多カラストテ止ミヌ。今猶鉱穴二十七所アリ。享保二年丁酉三月旧幕府ヨリ巡察使ヲ西国ニ遣サレシ時、此所ニ立寄リ、堂ノ尾ト所云ニテ、是ヲ蹈鞴ニカケシト云。金控碓ト云モノ、山中所々ニノコレリ。嘉永六年癸丑二月旧藩ニテ新金坑ヲ開カル。

以上古金坑　其田字常楽、三本平、大切、薬種畠、野口、仁田尾、牛ノ尾、井手ノ口、此外ニモアリ。出金ノ多キ事、田野村ニ亜ク。文久二年壬戌二月ヨリ休山セリ。

と見える。幕末に金坑を再開したことと、その場所まで明示していて内容が相当具体的になっている「出金ノ多キ事」とあるから、昔の幼稚な方法では「休山」するのやむなきに至る程であったにしても、相当の埋蔵量があるものと見られる。

写真の金控碓の前面には

安政二年
卯八月吉日
上八村
奉納
金山

と彫られており、石質は俗にカンカン石と呼ばれる最硬質の玄武岩を使用している。これは上が凹面になっているので上下二ケのうちの下碓であって、真中の径八糎程の穴に鉄棒が立てられ、穴の通っている上碓がこれにはめられる。含金石がこの碓の間に入れられて上碓でたたいて廻してすりつぶす。それを更に水流式の道具にかけて金を採取するという具合であったらしい。記録で見ると、嘉永六年再開、文久二年休山となっているから、写真の碓が産金祈願をこめて奉納された時は上八の金山の最盛期に当る。この事実をもってみても宗像大社の霊験まことにあらたかなるものがあるといわねばならない。

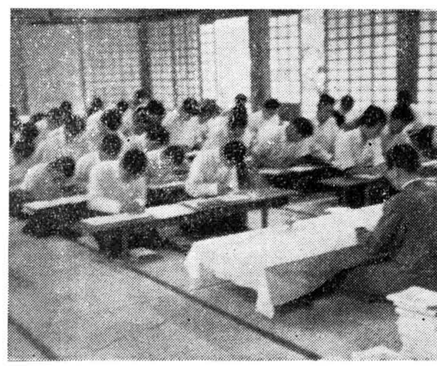
鐘の岬には景勝地を占めて宗像大社と最もゆかりの深い摂社織幡神社が鎮座している。好日、金運にあやかって参拝がてら上八の遺蹟を探勝して郷土の歴史を同顧するのもまた意義があるであろう。

宗像大社日本学講究所 第一回 学問切磋会報告

去る九月二十三日、四の両日、宗像大社清明殿に於て、宗像の神威を仰ぎ、日本の道義の確立と正しい学風の樹立を期して宗像日本学講究所第一回学問切磋会が、驟雨沛然たる中に極めて整然と且つ厳粛裡に行われた。集まる者九州各地の有志青年百名。第一回の試みであるにも拘らず、終始乱れず盛大裡に終了し得たことは、一に宗像神徳の庇護に外ならない。

切磋会は二十三日十二時三十分大社参拝後に開会。次いで二時より熊本高校教諭野口三男氏の講話「日本の学問」が行われた。講話後、全員を分散して八班編成としそれぞれ班長を中心に班員相互に自己の問題を提起して問題解決を期せんと白熱の班会が展開された夕食後「夜」の部は午後七時より佐賀県立三養基高校教諭筒井充氏の「谷秦山先生私講謗論」の御講義祖述があり、終了後の班会では班員各自、日本人として立つべき自己の当面せる問題の究明に熾烈な切磋を行い、夜の更けるまで続けられた。

明けて第二日、夜来の豪雨も爽やかに晴れ上った二十四日朝六時起床、澄み渡った秋空を仰いで大社参拝の後、七時三十分から宗像大社・宗像日本学講究所講師難波江通泰氏の「吉田松陰先生士規七則」の御講義祖述が行われ、続いて班会に移った。昨日同様、魂と魂は触れあい日本道義の学によって己れの精神を日本的大転開に志向せんとする気魄の下、熱心な班会が繰り拡げられたやがて閉会式に移り、十二時萬歳三唱をもって一切を終了した。



講義・講話は、或は概説的に、或は具体的に、日本本来の道義学問により日本人の依って立つべき所を我が国の歴史伝統の中より、先哲の教に従って明確に講ぜられた。それは文字にすれば「君臣の義」「華夷の弁」ということになるであろうが、しかしこれは我が国三千年の歴史に於ける大問題であり、古来、幾多の先哲の終生研鑽されたところ、今日の世情ではこれを弊履の如くに捨てて顧みないが、これなくしては日本に存在する一切が、否、日本そのものが存在の価値も意味も失ってしまうのである。切磋会に集るところ総て無位・無官・無財・無力の者に過ぎないが、この日本存立の問題を自己の問題、自己の責任として起とうとする気魄と熱意の迸りをその面に輝やかしていた。

その感激を文に寄せて云う。「ためらいながら参加させていただいた切磋会でしたが、日本人としての尊い精神がハッキリと甦って居るのを感じて、しっかりした人間になろうと決意して居ります」と。又「我が国古来の伝統ある学風に接し、ともすれば曇り勝ちなる大和心を呼びさまして下されて深く感謝致します」更に「私も現在の立場において出来る限りの努力をして日本精神の復調に微力を尽す覚悟です」或は「学問講究への息吹きを直接身に感じ大変感銘を受け…一、日本人としての精神教育のあり方に光明を得た。二、日本学問の勉学への心構えについて指針を得た。三、古典勉学の必要を痛感した云々」と。又、炊事担当の当地の中山翁はその感銘を洩して言う「百人が一時に食事をするので大混雑をして大変なことになると溜息をついていた所が、物音一つも立てず、一人が食事をしている様であった」と。人により見るところはそれぞれ深浅差違はあろうが奉助天孫の神勅を仰ぎ互護互助の精神に則って我が国体を明らかにする学風、やがては宗像全郡の人心に薫染することであろう。

以上御報告申し上げます。

十一月祭事表

一日　月次祭　十時
三日　文化祭　十時
十五日　月次祭　十時
二十三日　生産感謝祭　十時（新嘗祭）

宗像談話室 或る村で

或る村で「祭礼の目的」を聞かれた。節くれ立った指を揃えて聞いていた農家の人々に、私は私の我流で次のようなお話をさせて頂いた。

××

全国の大字の数は約十万あります。神社の数も十万、つまり大字単位で氏神様が祭られている事になります。何々の国一の宮とか、ここの宗像大社のように一郡の総鎮守であり、また国家鎮護の御性格を持たれるお社もありますが、大方は部落単位の鎮守様です。

祭礼は年に春と秋の二度、乃至は例祭日を加えて三回位行われるのが普通です。お尋ねの「祭礼の目的」は、今申し上げた部落単位で全員が参加するという地域社会性を考えればお分りになると存じます。神職ののりとは古語が多いので一寸わかり兼ねる向きもあるかと思いますが、大体、神様に対して今年の豊作を祈り感謝申し上げます。そして氏子の皆さんが和楽して繁栄するようにとお願いする内容のものです。何千年の間というもの、私達は先祖の神をたたえて自分の勤めに励むことを誓い御加護をお願いして来ました。

皆さんが鎮守様の祭礼を厳粛になさることは立派なことです。ですが、近頃の祭礼は神人和楽するという姿からは少々変って来ています。というのは、祭典そのものは立派で結構ですが、それに反して村祭りには以前のように老幼男女が挙って参加する姿が少くなっているのです。時の流れのままに若い人たちの心が鎮守の森を離れるという影響が原因となっていることも確かです。仕方がない、当番の者だけがその時々の祭礼を立派にやればそれでいいじゃないかといえばそれまでです。しかしそれでよいでしょうか。祭りが本来鎮守様と村民全部が和楽すべきものであることは先程お話した通りです。それならば若い人たち、特に幼い人たちを何故に参加させないのか、ということになります。

今年の春、孔大寺神社のお祭に行って参りました。孔大寺山の頂上にお社があります。参拝者がぼつぼつありました。そして麓の鳥居脇の空地にはリンゴ箱に戸板をのせた程度でしたが、小さな露店が二三軒出ていました。飴菓子、風船、玩具、月光仮面の面などを売っているのです。山奥のお社の祭礼日、まことにささやかな風景でした。ところがどうでしょう。その下の方の部落から村の鼻たれ小僧らが息せき切っ上って来るのです。声をかけて聞いてみますと右手に汗ばむ程握り締めていた十円玉を開いて見せてにこにこ笑って「お祭り」と答えました。私ははっとしました。これこそ〃お祭り〃だと思ったのです。おわかりになりますか。いいですか、小さい子供たちは高い山の社殿迄登って行ってお参りしなくてもよいのです。今日はお祭りだから、十円貰って鎮守の森の露店に馳けつけるんだ、というその姿、その子供たちの何物にも代え難い喜びの姿に〃祭り〃があるのです。

懐しい村祭の幼い日の思い出に支えられて多分、あなた方も現在祭礼に奉仕しておられるのではありませんか。氏神様、つまり部落全体の御先祖様を祭ることは、神様と共に村民が和楽して、これを子孫に伝えることにあるのです。祖先を祭ることは、現在の幸福を願い、子孫の幸福を祈ることに外なりません。

さて、昭和三十二、三年の両度に亘って学術調査を行った結果、宗像大社沖津宮の鎮ります沖ノ島から二万一千余点に及ぶ御神宝類が出土したことは、皆さんお聞及びでしょう。何れも立派なものばかりで、千五六百年も以前の大和朝廷が沖津宮様に寄せられた祈りが如何に深く、且その祭祀が如何に厳重であったかを思わせます。

こうして千古の霊跡が顕彰され、出土した神宝類が永久に保全されることは無論ですが、ここに一つの重要なことが発見されたのですそれをお話いたしましょう。

わが国の書物として最も古いのは古事記、日本書紀、万葉集などです。これらの出来たのが千二百年位前です。ところが、あの玄海の真唯中の孤島である沖ノ島の御神宝類は推定千五六百年以前のものです。所謂歴史時代を遡ること数百年以前の御神宝です。三十数面の銅鏡が発見されておりますがその中に文字のあるものがあったのです。我が国最古の文字に属するでしょう。くわしくは〃続沖ノ島〃に出ていますが、第十七号遺跡から出土した鏡のうちの一つに

冨宜子孫

の四文字が鋳込まれているのです。御承知の通り、鏡は御神体にも比すべき重要なものです。これらが、悠久千古のむかし大和朝廷が「国家鎮護」の祈願をこめて厳粛な祭祀を行うに当って、最高の神宝類を捧げたしるしであることを考え合わせてみるならば、更に全体の御神宝中に唯一の祈願文字がこの四文字であった事は、私には容易ならぬ重大事であるように思えるのです。神を祭ることは取りも直さず子孫が富み栄えますようにという祈りに外ならないからです。

沖ノ島の祭祀遺跡は単なる遺跡ではなくて現在も尚生き生きと生命を伝えております。世界の驚異ともいうべき連綿たる祭りの姿、信仰の姿は日本民族だけにあるものです。

さあ皆さんお祭りの目的がおわかりになりましたか。部落全部が参加するお祭りを考えて下さい。参拝者に出す一杯の神酒、一箇の神菓、そしてささやかな露店の賑わい等も一つの方法でしょう。真に楽しい祭りを行う所から新時代の国民性が培われるものと信じます。氏神様を大切にして下さい。子供の喜ぶお祭りにして下さい。

（半可草人）

社務日誌抄

八月二十八日　大隈宗像警察署長転任挨拶のため来社、天野徳三郎氏葬儀につき宮司出向

八月三十一日　定例職員会開催

九月一日　月次祭及び風鎮祭斎行、責任役員会開催、氏子正副会長会開催、二学期第一回剣道指導少年出席四〇名

九月三日　郡内敬神婦人会総会清明殿に於いて約一六〇名参加、万葉歌碑打合会、地元総代高宮除草全員奉仕

九月六日　心字池一部埋立工事の一切を終了木日内山建設退社

九月七日　放生会関係録音聴取の為NHK来社、重松宗像警察署長新任挨拶のため来社

九月八日　評議員会開催、放生会について警察、保健所、土木事務所、西鉄赤間営業所長の四者会談開催、安部教育長共同収蔵庫の件につき来社

九月九日　放生会相撲打合会開催

九月十五日　月次祭

九月十七日　萬葉歌碑の件につき会議開催寿野氏子会長外多数出席、阿曇志賀町長、玄海町嶺、中野、田中三議員来社

九月十八日　消防団幹部放生会警備についての打合会開催

九月二十三日　宗像大社学問切磋会本明日

九月二十六日　職員会議

九月三十日　午后五時地主祭午后九時御生祭斎行

十月一日　高宮地主祭に引続き総社秋季大祭第一日祭

十月二日　秋季大祭第二日祭

十月三日　秋季大祭第三日祭

十月四日　徳山製油所秋祭奉仕のため職員三名出向

十月五日　田島校区婦人会員境内清掃奉仕

十月六日　社史下巻資料調査のため小島、梅田両委員来社

十月十一日　郡交通安全協会宗像警察署主催交通安全祈願祭

十月十二日　神戸市出光興産社員二名神符拝戴のため来社

十月十四日　社務所に於いて田島高等小学校第六回卒業生（明治三十六年生）同窓会開催、社史資料調査中の小島、梅田委員本日退社、

十月十五日　月次祭、中津宮月次祭並に大島少年剣道部発会式のため権宮司及吉武部長出張、東京教育大教授肥後和男氏来社

十月十六日　広島大学文学部金子教授来社、日本宗教学会々員四〇名来社

十月十八日　福岡県観光協会会員妻野氏外約五〇名来社

十月十九日　祖霊社の件にて吉武儀一郎、高向益次郎来社、宮司、権宮司面談

十月二十日　八幡製鉄株式会社赤間団地特別措置住宅竣工祭、職員四名出張

当社職員 葦津君華燭

当社の中堅職員である葦津嘉之君が結婚された。新婦は田島字吉田の中村ときわ嬢である。十月七日筥崎宮で挙式後福岡の第一ビルのグリルに於て名士多数の参列のもとに華やかな披露の宴が催された。同君の御多幸を祈る。

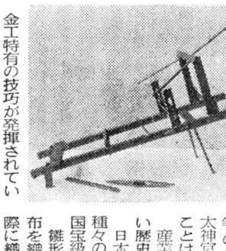
宗像大社宝物紹介　其の10

沖津宮神宝の雛形織機を紹介します。

今日でいう座機・下機・或は布機と呼ばれる類で、機台や属品は一揃となって、すべて原機にかたどって分解組立てが出来るようになっている。

機台の長さ四八糎（一尺五寸）前脚高さ一二・八糎（四寸）・台外幅一六・七糎（五・五寸）。

木製の加工は角や平の材で、さして技巧を要しないように考えられるが、これを金属器に写したこの場合は、細かい心くばりが随所に見られ、決していい加減な模型になっていない。すべてが原態の忠実な模写である。



金工特有の技巧が発揮されている。

この雛形に示される形態は、近世まで一般に各地で見られた構造と大差ないものであるが、一方さかのぼっては平安朝の絵巻物などに見える図にも以ている。

近世のものでないことは、既に黒田長政の伝記があり、これ等の織機の金銅製雛形が、皇大神宮の神宝として奉納されたことは記録の示す通りである。

産業神として、特に縁りの深い歴史的遺型の逸品である。

日本最古の織機の様相を示し種々の角度から見て、又となき国宝級の珍品である。

雛形と云われているが実際に布を織ることが出来るので、実際に織って神にささげたものではないだろうかとの学者の説がある。

神事解説 しもつきの神事

十一月は霜月で、既に霜の置くまでには稲の刈入れも終り、野山も時雨と木枯しにさらされる季節になる。農作業も、やがて脱穀も終ると後はその収穫の俵を前にして、村人は互いにその労苦を犒い、神祭りをして楽しみを共にする。これが霜月祭である。

秋祭りは、九・十・十一月の三カ月にわたって行われる。これは正月、盆の行事の日が一定しているのに較べると多少趣きを異にする。日本が東北から西南にかけて細長い国なので収穫期の一定しない為でもあろう。

この時機の祭りを「饗祭」（あえのまつり）という。新穀を神に捧げて一族相会して感謝の意を表する。ために地方によってはこれを「饗の事」（あえ）と呼ぶ。

北九州では特に十一月の丑の日に餅をついて祝い、おしおいの砂をあげて鎮守に大山祇を祭る所がある。そして臼の中に小豆飯を入れた一升桝を置き、或いは箕の上に膳を据え、一尺二寸の柳の箸を添える。これは埼玉のエビス講祭りとも共通しており、他の地方の亥の子祭、または正月祭の年棚とも似ている。長崎ではオウシサマといってこの日の為に刈り残して置いた十二株又は七株の稲を主人が刈って来る。これを豊作のしるしとして箕の上に飾ってまつる。（四国にも同風習あり）博多附近では田の神天神といってまつり、壱岐や阿蘇では丑の日に大黒を祭る。

石川県鳳至郡、珠洲郡ではアエノコトといって十一月四日五日のまつりをする。家庭では田の神を入浴させ申すといって、昼から風呂をたて、主人みずから湯加減を見、主人自ら神の代理として入浴する。それから夜は主人自ら椀のふたをとり、来客に対する如く一つ一つの料理の名を告げて神に饗応する。この膳部に二股大根の煮物をそえるのは、十日夜や大師講のまつりと繋がることがしられる

その他の地方では、多くはこの月の満月もしくは下弦の日をえらんで神祭を行う。

関東中国地方では霜月三夜といって二十三夜の月待ちをして拝む風習がある。山陰から東の方は、全国的にこの夜から二十四日にかけて尊い旅人が年に一度村々を訪ずれると考えられ、この日を大師講と呼んでいる。

又、この月の十五日に霜月の刈上げまつりをする所がある。現在は七五三の祝日として普及しているが、東北関東では「油祝い」といって油気のあるものを食う。埼玉ではこの日を「霜月遊山」といって若い嫁婿がソバを持って里帰りをする。対馬にもソバ餅を焼いて「まつりおさめ」をする所がある

岡山県赤磐郡高月村の高蔵神社では「杵舞」の芸能がある。このあと十九日迄男女が集って饗宴する所があるのは、望月を中心として朔日から下旬に及ぶ行事の性格を理解せしめる。

以上のほか十一月八日のタタラマツリ（鍛冶屋祭り、金物屋祭り）十五日のアブラシメ行事、四の日のフグリガユまつり、アワダイシコウ、ハダカダイシや、二十四日を年越祭とするものや、三大子といって巳の日をまつるもの等が全国各地にある。

明治に官制によって二十三日を新嘗祭としたのは陰暦十一月中卯日の宮中新嘗行事の日を固定したものである。

またこの月には酉の市、亥日祝甲子祭、山神講等が賑やかに行われる。われ人共に喜びを分つ昔からの風習がここに見られる。この喜びは十二月初めに終る。これがこの月の一名をシハス（為果す）と呼ぶ所以である。

×　×　×

在京宗像郡人会近況報告

拝啓、秋冷の候皆さまには益々御健祥のこととお慶び申し上げます。

御紙「宗像」は発刊以来、益々内容も充実され、私ども故郷を遠く離れたものにとっては、宗像の香り豊かな記事は毎月待ちどおしく、何よりの楽しみとして読ませて貰っています。

さて、まえまえから東京宗像会の様子を一度報告するように言われておりましたが、つい諸事に紛れて、拙文ながら近況を御報告いたします。

東京に於ては、すでに古くから宗像郡出身の諸先輩が活躍されており、宗像郡人の集まりも折にふれて開かれていたようですが、在京宗像郡人会として、会員の名簿をつくって正式に発足したのは昭和三十一年です。顧問に宗像の大先輩たる出光興産（株）社長出光佐三氏（赤間出身）、（株）日立製作所社長倉田主税氏（神興出身）を迎え、会の事務所を出光興産本社内において発足しました。

すでに、三回の郡人会総会が開催されておりますが、今日は第三回郡人会の様子を一寸紹介しておきましょう。

第三回郡人会は、昭和三十四年十月八日東京虎ノ門共済会館で開かれ、約百人の在京郡人が集まりました。会は、出光泰亮氏（出光興産監査役ー赤間出身ー）魚住芳平氏（魚住接骨院長ー津屋崎町出身ー）の世話人の司会で始められ当時新入会の安永渡平氏（八幡化学社長ー赤間出身ー）の挨拶、出光社長の宗像神社についての近況報告等があり、極めて和やかな雰囲気の中で盛会裡に終りました。その模様は当時西日本新聞に日本人の郡人会として紹介されました

その後、郡人会名簿もますます整備されており、郡人の新入京、離京はその都度、郡人会事務所に報告されますので、会員の動静は当方ご逐一分る仕組みになっております。従って今后は、出来るだけ宗像会及び会員の動静を貴紙に報告致したく思っています。

以上、簡単に在京宗像郡人会の模様を記しましたが、本会は今后とも宗像郡人の親睦と繁栄を目指して努力してゆくつもりですから宜敷く御指導の程お願いします。

なお、最后に、本会員総数二百四十九名の中より、本文中に記した方以外の知名士を若干名紹介させて頂きます。このほかにも多士済々ですが、紙面の都合で省略させて頂きます。

安部清美氏　参院議員　東郷出身
赤間文三氏　〃　津屋崎〃
吉田法晴氏　〃　河東〃
出光計助氏　出光興産（株）副社長　赤間〃
石田正実氏　〃専務　〃
石松正鉄氏　住友石炭鉱業（株）社長　〃
和田伯士氏　日東化学工業（株）副社長　〃
以上

町村往来

やぶさめの神事　玄海町宗像神社　宗像郡玄海町宗像神社で二日"やぶさめ"の神事が行なわれた。このやぶさめは一日から三日間開かれており、同神社の放生会の呼び物の一つで来年の豊作物の豊凶を占う恒例の行事。陣笠、格衣姿の射手が疾走する馬上から的をねらい、引きしぼった弓からひょうとばかりに矢が放たれると黒山の見物人は大きくどよめいた。なお同日は郡内の各学校一部の官庁はおやすみで境内は終日ごった返した。

慰問　宗像町赤間校区婦人会長ら会員二十数人は2日緑風園をたずね、衣類、お菓子などを贈ったほか演芸を披露して慰めた。

◆婦人会ボロ回収の収益◆　郡婦人会は会運営資金集めの一つとしてボロ古紙の回収を行なっていたがボロ二十八トン（二十七万二千円）古紙八十八トン（三万四千円）が集まり計三十万余円で売却した。

県交通安全作品に入賞　郡内小学校では県交通安全啓発の作品展に出品していたが、中村真一君（福間小六年）が作文の部に一等、許斐紀子さん（同四年）が図画の部に五等に入賞したむね宗像署に知らせがあった。

養老施設慰問　玄海町田島校区婦人会の田中ヒサノ副会長ら会員二十数人は5日緑風園をたずねとしよりたちにお菓子を贈った。

宗像町体育大会　8日午前8時半、中央中学校、宗像高校。種目はバレー、リレー、ソフトボールで、四十チームが参加。

郡青年研究集会　7、8両日福間町公民館、レクリエーション分科会、フォークダンスなど、支部長以上六十人が参加。

東郷地区街灯点灯式　8日午前10時、宗像信用組合二階。

摩利支神社秋季大祭　宗像町東郷摩利支神社秋の大祭は8、9両日開かれる。

第六回宗像郡赤ちゃんコンテスト　県、西日本新聞社共催で十日午前九時から宗像保健所で開く。郡内二十二地区の予選で選ばれた赤ちゃん三十三人が集る。

郡中学校陸上競技　雨で延期となり、10日午前10時から玄海中学校で行なう。

ナタネ機械化まき現地研究会　12日午後1時から玄海町田島村山政雄さんの田んぼで。当日は農機具展示実演もある。

道路清掃　秋季道路愛護週間の10日、郡内いっせいに道路をそうじするが、渡辺土木事務所長、各町村長らが自動車で郡内を見て回る。

交通安全運動行事　11日午前10時、宗像神社で優良運転者表彰、座談会、同神社ー神湊ー津屋崎ー福間ー東郷ー赤間ー東郷のコースでパレードを行なう。

宗像町健康家庭など表彰　11日午後2時、公民館で35年度国民健康保険税完納の吉武向口支部など十六支部に感謝状と健康家庭立花茂雄さんら七十九家庭を表彰する。

福間町商店経営講習会　11日午後1時、福間会館、講師は県商工会連合会事務局長上野孝介氏通産省登録診断員柳田博氏。

郡畜産品評会　11日午前9時宗像町田熊の家畜市場。

養老施設慰問　宗像町城山中学校二年三組吉田八重子ら生徒代表者十二人、東郷校区久原婦人会の岡田ハツエさんら会員十八人、宗像町後曲婦人会の上津ハル子さんら会員三十五人は7日緑風園をたずね、お菓子、衣類、白米などを贈ったり、演芸を披露した。

玄海町町民体育大会　14日午前9時、玄海中学校、種目はバレー、リレー。

郡社会教育振興大会　15日午前9時半、東郷小学校で分科会、全体発表、討論、講評などがあり、社会教育に功労があった団体、個人を表彰する。

調停相談会　17日午前10時から午後4時まで宗像町公民館で土地、家屋金銭貸借、家庭内の問題などで悩んでいる人々の相談に応じる。当日は弁護士、調停委員判事らが出席。

宗像町商業講座　15日午後5時宗像信用組合二階、受講者男女店員。

福間小学校父母教育　15日午後1時半、講師は福岡学大久留米分校橋田義雄教授。

郡囲碁大会　15日午前9時津屋崎町青年研修所。

運動会　13日東郷小、15日地島小。

津屋崎町巡回映画　13日宮司14日在自、15日須多田、16日大石、17日生家、18日奴山、19日桂区、20日勝浦浜、21日西東、22日松原、23日塩浜梅津、24日末広、25日渡、26日町部、映画は『とのさま弥次喜多』とニュース。

慰問　宗像町田熊町伊規須サダ子さんは16日緑風園のとしよりたちにあま酒のこうじを贈った。

郡民体育大会　22日午前9時半、宗像高校。種目バレー、リレー　西日本新聞社後援。

宗像調停協会秋季総会　23日正午、玄海町神湊魚屋。

（西日本新聞より）

めでたい同窓会

十月十四日社務所に於て同窓会が開かれた。正式の名称は、田島高等小学校第六回卒業生同窓会ということ。明治三十六年の卒業であるから、当時の紅顔のわるそう達にとっては六十年来の会合ということになる。会合者は田島の安部ミキ先生（87才）をはじめ、安部五六（池野）小林貞平（鐘崎）吉武儀一郎（宿谷）永島金作（勝浦）山路虎雄（八幡）高橋昇（福岡）永島計七（勝浦）花田市蔵（池野）福崎虎雄（田島）吉武源三郎（田島）といった何れも七十二、三才になるメンメンである。当時三十四名程の同窓生が現在十名、当時の校舎（参籠殿、鎮国寺）を偲んで社務所に集まった。

「今は〃野球〃と云うばって、わしらの学校時代はベースボールと云うたもんな」

大層な気嫌で、午後自動車に分乗して鐘崎の秋色を愛すべく出発した。この人達にとっては孫位にあたるお宮の職員たちが手を振って見送っていた。

織幡神社秋祭（鐘崎）　十月九日夜、強風の中を御神幸祭が行われた。仮設角力場では子供角力大会が賑わっていた。

的原神社秋祭（八並）　十月十二日、秋晴れの穏やかな日和、古式通りの神饌を捧げて関係者参列の上厳重に斎行された。

村山政雄氏の栄誉
―皇居に献上米―

田島片脇に住む同氏は早期栽培の品評会で県下一位の人。選ばれて今年の献上米を捧持して今月二十六日上京した。これに先立って九月二十九日献米田修祓、十月二十六日宗像大社で奉告祭を斎行。

宗像大社剣道部
大島少年剣道部発会式

田島の少年達が元気に剣道を稽古しているのに刺激されて、大島の父兄関係者が相談した結果、去る十五日に中津宮の神前で漸く発会の運びとなった。入会者七十五名、奉告祭ののち、発会式を行い田島から応援にかけつけた十六名の少年剣士たちの基本稽古を熱心に見学した。今に大島にも竹刀の音が勇ましくこだまするであろう。

役員次の通り
部長　大島俊基（村長）
副部長　丸井八五郎（総代）
〃　河野幸人（郵便局長）
〃　赤星安雄（小学校長）
顧問　久保宮司
〃　越智汎愛（中学校教諭）

沖ノ島の忌詞（いみことば）について　(三)
越智汎愛

昭和十三年頃戦地でたまく読んだサンデー毎日に小説家海音寺潮五郎氏のオランダの旗という小説の中にチンタはオランダの酒だと書いてあった事から長い間、心の隅であれこれ考えて来た。先年黒板勝美博士の名著国史の研究を読んでいると外来語の項に、チンタは赤ブドー酒原語はポルトガル語と書いてあるのを見て、辞海をくると、やはり同じ様に出ている。いずれにせよ、チンタは日本語でなく西洋の言葉であることにはまちがいがない。

沖ノ島の忌詞で、シヤチをきらうのに、わざく外来語を持って来てこれを使用するのは何故だろうか。これは古来の忌詞ではなく防人日記の「海人が定めつると覚しくていやし」きものの様ではあるが、私は沖ノ島の忌詞の中でこれらが目下思考の中心になるわけである。

六　沖ノ島忌詞の歴史的意義

吾が国最古の古事記や日本書紀の中に、すでに三神奉斎の事が記してある沖ノ島は如何に古くから知られているかが分ると同時に、記紀成立以前に於いて、朝鮮から、或は朝鮮を通じて中国から、大挙して渡来した民族があった歴史的事実から見ても、沖ノ島がその海路の要衝に当っていたかは―地理的にも、また沖ノ島を含む宗像神の別名を書紀に於ては「道主貴」と尊称した事例からも、充分察知される事である。

又、室町時代以前に於ける所謂倭寇が、この地方を根拠地にした事実もある所から、朝鮮の古語が自然沖ノ島の忌詞中に転用される様になった事はあり得ると思われる。

即ち、宗像神社史の中にも幾つかの例が挙げてあるが、李朝世宗実録巻四六に永享元年（約五三〇年前）李朝の世宗の命を受けて、室町幕府に対する日本通信使として来航した朴瑞生が帰国しての報告文がある。

「前略……対馬より兵庫に至るまでの途中に於いて海賊の数及往来の路をつまびらかにした処によれば、対馬一岐内外大島（筑前）志賀島（筑前）平戸は赤間関以西の海賊根拠地であり……中略……内外大島の海賊は宗像氏が支配し……下略」と記されている。内外大島については他に考え方があるかも知れないが、筑前にあり、宗像氏がその海賊を支配していると通信使が見聞した事には、さした間違いはないと思われる。

更に、後述の如く江戸初期に於いて筑前大島に外国人の漂着？があった時、黒田藩より老中初め幕府の諸役に対して送った案文によれば「……当月十二日私領内大嶋と中島の……」とあるが、これはその他のケ所と見合わせても、私領内大島でなく、私領　内大嶋と、私領で区切ってある事は文体からも知られると思う。

従って外大島は沖ノ島と判じて間違いないと思われる。

それで、外大島である沖ノ島は内大島と共に倭寇との関係、朝鮮との関係が深かったと考えられるのである。

江戸時代に入って国内が統一され倭寇の勢力も衰え、次いで、鎖国令が発せられてからは、海外貿易も局限されて不便になったが、貿易の利を追って朝鮮中国を始め西洋諸国の密貿易船が秘かに来航し、取締りが厳重になればなる程所謂内外大島附近は絶好の取引地点に選ばれた事であろうと想像されるのである。（つづく）

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番

宗像伝説　其の十

きつねつきの話

むかしから庄屋株といえば自他共に許した「お家柄」でありました。物質的には何ら不自由がなく人柄がおっとりとしていて、人々の気に障るようなことなど何一つ云う必要もありません。それだけに少々たがの緩んだような人が多かったことも事実であったでしょう。

ある時、許斐山の麓の部落に庄屋がありました。そこの若い嫁さんに狐がついたという噂が近所に拡がり、そのうちに大評判になったのです。

その若嫁さんというのが一体どうしたのかといいますと、昼間はぼろを着てまるでお化けのようにふらふらと歩き廻っていますが、夜になると鏡の前に坐り、髪形を整えお化粧などを済ませて素敵な美人となります。それから一室に閉じこもってしまい家の人を（御主人でも）一歩も近づけません。変なことになったものです。そんなことが一年も二年も続きました庄屋さんも家柄の手前ひとにも打ち明けられず、家内中の心配は一と通りではありませんでした。

そこで或る日、夜になってから家の人が打合せて若嫁の閉じ籠った部屋をのぞいてみました。するとどうでしょう。一人しかいない筈の部屋の中にはお嫁さんと向い合った美少年、年でいうなら十五六才の前髪立ちの少年が、紫袴に赤色金襴の着物を着てちやっかりと坐っているのです。

やがてその美少年が手を伸ばすと、それを待っていたようにお嫁さんが抱きつきました。あられもなく裾が乱れて見ちゃいられません。のぞいていた家人が思わずごくりと生唾をのみました。

× ×

これではいかん、ということになり、家ではお嫁さんを裏庭に別室をつくってかん禁しました。外部に出入出来ないようにしてしまったのです。

ところがどうでしょうお嫁さんは昼間はぼんやり見るかげもない萎れかたをしているのに、夜になると俄然張切ってしまいます。のぞいてみると、どこも明かない筈なのに例の若衆がいるのです。そして夜の白々と明ける頃に何時とはなしにいなくなってしまいますこんなことが毎夜のように続きました。

知らぬようでも世間では大抵知っています。庄屋でも隣近所に合せる顔がありません。相談の結果祈祷師に頼んで治して貰うことにしました。

祈祷師なんていい加減なものです。「これは狐つきだ」と断定しました。そして病人の頭から水をかければ狐が抜けるに違いない、といってどんどんかけました。目も口もあけられません。精魂つきた嫁さんが白状したのです。

「我こそは許斐山に二百年も前から住んでいる狐だ。毎夜忍んで嫁さんを喜ばしているものを何で水をかけるのだ。水ぐらいには負けんぞ。馬鹿者共が」

その時の嫁さんの口つきがとんがって狐そっくりだったものですから家人が怒りました。

「こん畜生！しっこいことをいうて、性こりもないやっちゃ」

またまた水責めをはじめましたいい加減な祈祷師の口車に乗せられた家人は、つい嫁さんの身体のことを忘れてしまいました。パッタリ倒れた嫁さんはとうとう息を引き取ってしまったのです。

「狐野郎これでくたばった。さあ嫁御を呼び起せ」

という祈祷師の声に、我にかえった家人が嫁さんを抱きかかえて呼び起しにかかりました。しかしこと切れて冷たくなっています。

人々が気がついた時には祈祷師はもうそこらにはいませんでした

さて、狐つきだったのは果して嫁さんだったのでしょうか、それとも祈祷師だったでしょうか。ひょっとすると庄屋さんの家族だったかもしれませんね。（T）

仰陽僑居童問

日本過去百年の歩み

（其の七）前月につづく　——最終回——

超喜叟　出光お手や

我第二軍と鴨緑江軍は右翼より第一、第四軍は正面より、第三軍は左翼に迂回行動を行ひ、一斉に進んで、奉天の露軍に迫った。此戦局は三月七日より進展し、我軍等しく奉天の露軍を包囲し明治三十八年三月十日全く之を占領した。そのときの捕虜三萬以上、両軍の兵数合せて八十五萬、砲二千五百門に上る大戦果であった。

陸上において奉天の大会戦が了って程なく、空前の大海戦が日本海海上に展開せられた。

これより先、露国は東洋に在る自国の海軍を救援する為に、バルチック艦隊を東洋に派遣することとし、ロヂエストウエンスキ提督を司令長官に任じ、明治三十七年十月十二日露国を出発せしめた。爾来亜弗利加を南廻りして、印度洋に出で、一萬七千浬の長き航程を経て、翌卅八年五月我近海に到来した。浦塩港に入る目的で、五月廿七日、対馬海峡に進んで来た。バルチック艦隊来るの報に接し、久しく鶴首翹望していた我聯合艦隊は直ちに之を邀撃し、海戦は沖ノ島附近に展開した。東郷聯合艦隊司令長官が「皇国ノ興敗此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮励努力セヨ」と激励されたのはこの時であった。軈て、戦酣にして、敵の旗艦スワロフ以下諸艦多く撃沈され同夜の水雷攻撃も着々其功を奏し翌二十八日更に包囲攻撃を行ったが、敵の第三艦隊司令長官ネボカトフは力尽きて、先ず降伏し、総司令長官ロヂエストウエンスキー提督は駆逐艦に乗って遁走中、我艦隊に要撃され、之亦捕虜となった。敵艦の総数三十数隻殆ど全部撃沈若くは捕獲せられ、露国海軍は玆に全滅したのである。

〇　〇

かくして、陸上では奉天の会戦によりて敵を撃破し、海上においては、日本海々戦において決定的の勝利を以て、敵の艦隊を全滅せしめ、茲に局面は一変し、露国をして終に講和を乞ふの已むなきを覚らしめた。露国のウヰツテーが講和使節となったとき、時の露国海軍大臣ビリレフは「艦隊のことは最早言うに堪えない。今では日本は極東における海上の完全なる主人公である」といったと伝えられた程惨敗を喫したのであるから、傲慢な露国が飜然自我を棄て、講和を念じたのも当然のことであった。

日露戦争で大勝利を得た結果、日本は実に刮目すべき躍進的発展を遂げ、完全に世界の列強国の中に列し、世界外交の桧舞台に乗り出すことになり、極東の問題においては、優に極東の盟主の地位を占め、欧米列国の孰れもが、我国を措いて、極東のことを論じ得ない様相となったのである。さあ皆さん、日本はいつでも弱いでしょうか。明治三十七、八年の当時、露国は世界一の強い陸軍国であったまた、その海軍の兵力は日本の海軍の殆ど二倍もあった。このでかい強い露国を日本は打ち負かしたのである。

M生。「あゝ今日は、ほんとうに悪夢から覚めた気持で胸中は一杯です。今日まで、学校や雑誌や環境の大人だちの噂で「日本は弱いものだ」とばかり聞かされていましたが、何たる誤りでしょう。矢張り、日本は国民が一生懸命になれば、ほんとうに強いのですねそれにしても、あの三国干渉から僅か十年の間にどうして、そんなに日本は強くなったのですか。」

老師「日清戦争の直後、我国は三国干渉に対し涙を呑んで露国に屈服した。そのとき、日本国民が、露国はでっかい強い国、とても叶わぬというような卑屈な根性で、その日その日を暮していたなら、日露戦争に大勝を博するどころか日本はとうの昔、露国の属領と化せられていたかも知れない。三国干渉以来、我国は明治天皇を中心に仰ぎ、全国民が協力一致、露国に勝って、日本を守らねばならぬとの一大覚悟を以て奮闘努力し、互に助け合って国の力を増強することに十年の間文字通り臥薪嘗胆の辛苦をした結果であります。今太平洋戦争で日本は敗れた。そして日本の軍隊は破壊され、物質的精神的にも色々苦痛を与えられた此の時「ソ連はでっかい、合衆国は強い、到底叶わないというような卑屈な根性で毎日過ごしていたら、どうなるでしょう。日本は遂に、ソ連や合衆国の属国にされるかも知れぬ。日本は決して弱虫ではない。日本国民全体が一致協力し真に臥薪嘗胆の辛苦を積まば我国は必ず世界の列強に列することになるのであります。」

K生。「日本や日本人は決して弱虫でないことがはっきり判りました。明治時代、僕等の御祖父さんや御祖母さんが立派な手本を示されたように、これから、僕等は一生懸命に臥薪嘗胆の辛酸を積み重ね、ソ連や米国に負けない、強い輝しい日本を再興することを決意しました。」

学童一同。「賛成賛成、僕等一同大いにやります。」

老師。「今の決意を貫徹する為には毎日一生懸命勉強して立派な人格の人になることが第一要件であります。そして、この要件を達成する為には、自分の精神力を鍛錬することが肝要です。古人も「精神一到何事不成」と訓えているのである。さあ、こゝで、皆さんが真剣に日本再興の道へ進邁する道標の印として自作の短歌を一つ上げましょう。よく、この意味を研究咀嚼して実行し決意を貫徹して下さい。

なんのその、岩をもとほす梓弓
同志ひきゐて祖国を興さむ

（おわり）

図書紹介

兄弟文庫叢刊

二川相近〃鳴の羽根かき〃

——二川相近（すけちか）翁——その人物と今様歌集「鳴の羽根かき」について

去る五・六月の頃、「兄弟文庫」より二川相近翁の今様歌集「鳴の羽根かき」が出版された。

その凡例によれば、本書は、「二川相近風韻」中より今様の部「鳴の羽根かき」及び「集外雑詠」の抜萃を小冊にしたもので、その原本は、昭和十一年十一月五日、故翁の百年祭記念に翁の玄孫滝三郎氏が家蔵のものに基き編集発行されたものであり、しかして昨春、皇孫殿下御降誕を奉祝して、右の兄弟文庫同人の間で本書の出版を企劃されたが、事情あって一年の遷延となったということである。

本書はA五版、二十三頁の薄手の小冊子、巻頭に両面アートの写真があり、第一面には翁の門人庄林藤橘氏の筆になる翁の肖像に題賛の一幅を掲げ、裏面写真の上には天保三年元旦の翁の試筆「君が代」があり、下には「花よりあくるみ吉野の」の相近翁詠じ且つ書せるところの今様一幅がある。続いて幡掛正浩氏の序言。凡例。目次。翁の今様「鳴の羽根かき」五十七首、松元石哲家所伝本「鳴のはね掻」十首の採録補遺、及び、集外雑詠三十四首を収め、更に附録として翁の今様に関する説明其一・其二に併せて「神社新報」昭和三十二年八月二十四日号所収の幡掛正浩氏の「黒田節私断」を一部転載し、最後に翁の玄孫、二川滝三郎氏の解説で掉尾を飾り一篇を成している。

二川相近翁、字は幸進。松隠嬰風などと号した。明和四年十一月二十四日福岡桝木屋町の実家に生れ天保七年九月二十七日七十歳で同家に病歿したから、今から数えて百九十四年前に生れ、百二十五年前に亡くなった事になり、その間寛政の改革あり、化政の爛熟ありそして晩年は、漸く幕末の風雲、急を告げんとする頃であった。

二川家は世々庖厨の事を以て黒田藩に仕えたが翁は幼にして頴悟、長じて英邁、気節あって世に媚びず、若年にして学を好み、黒田藩々儒亀井南冥に従学して才子と称せられた。又、最も書道に長じ、書家としての令名も高かった。しかし翁は、世間尋常一様の書家ではなかった。伝にいう。超俗群を抜いて風骨を帯びその卓越せる見識は屢々俗流の意表を衝いたと。又、翁は恬淡、貧賤に安んじて名利名聞に囚われることなく、超然、ただ風流雅韻をこととしてこれを楽しんだ。翁は温雅平静、起居動作や言語応対は頗る礼にかない、極めて謹厳で、自ら律すること甚峻烈であった。その依って来る所は、平生、翁の敬仰するところは古今忠臣の義烈であり、重んずるところは我が国体であり、尊ぶところは我が皇室であった。例えば、吉野忠臣の歌集を長女に筆写させて此れを愛誦し、大楠公湊川奮戦の図を描いては今様一首を副え、菊地武時公を敬慕してはその墓畔に愛樹吉野桜を移植し、児島高徳公を偲んでは今様一首を詠じ、且つ、毎年元旦の試筆には「君が代」の歌を謹書してその最期まで休止廃絶することが無かったという。このことは翁が日本の道義によって起ち、国を以て仆れんとするその志の堅忍確固たる自覚より発現したところのものであって、翁が一面、風流数奇者の面を見せながら、反面、端厳謹直慎しみある君子道義の風格のあるのは、蓋し、この志、この自覚より出たものであろう。

翁は若き日は、亀井南冥に従って漢学を学んだが、中年以後は国典国書に専念した。抑々、明治維新を考える時、野村望東尼の隠然たる活躍を度外視することは出来ないが、その野村望東尼を想うとき、更にその歌道の師たる大隅言道を無視することが出来ず、さらにその大隅言道を云う時は、その師、二川相近翁に着眼せねばならぬ。即ち明治維新は相近翁すでに此の世を去って三十年の後に起ったものではあったが、しかし翁が在世中に敬仰した国史中の、特に建武中興の忠臣義士の精神は、翁を通じてその門弟に流れ伝わって遂に維新の実現となったのであった。維新に際して活躍した志士は多い。しかし其の前夜、世の流れに抗して身を困窮におき、しかも維新の精神的指導を行った人は極めて寥々であるが、その寥々たる中の一人が実にこの二川相近翁なのであった。

扨、その今様を見てみると、感懐・述志などの類を除いて断然多いのは「春」を詠んだ二十数首である。次は「秋」の約二十首、「冬」は数首に過ぎない。「春」を詠じたもののうち約十首は「朝」であり「秋」約二十首はその殆んど「夕」であり、「夏」はその半数が「夜」であって、冬の作は清女を想い起させるものを感ずる。「春」のうち「桜」が六首、「梅」の五首がこれに次ぐ。又、「吉野」を詠んだものが五首あり、その中に例の

花よりあくる三吉野の
春の曙見せたらは
からくに人もこまひとも
大倭心になりぬへし

が見える。「秋」は「雁」「紅葉」が三首、「しぐれ」「虫」が二首、その他、霜・鳥・尾花などがあるが、二首以上に亘るものはない。又、「夏」は「郭公」が三首あるのみで、他に蛍・天の川・村雨などがいづれも一首ある。その他に、月・春雨・あられ・白菊・鶯・すみれ等、各々二首を見、他に蘭・千鳥・水鶏・胡蝶・夕顔などの詠がそれぞれ一首みられる。勿論、右の分類は、夫々、重複しているものもあることは免れ得ない。

驚くべきことは、其の作が古典をふまえているものの多いことである。これを本歌取といえば本歌取であろうが、しかしそれは、翁の古典・古歌に対する造詣の深いことを寧ろ證するものである。例をとってみれば

野への秋風身にしみて
うつらなくなる深草や
ふりゆく秋の山のはに
昔なからの三日月

は、その上句ほとんど全歌を採って居り

此の虫は何の子
そこそこし鬼かろみしてふ
おのかかほにゝれはとて
くち葉の襲につゝめり

には、明らかに「枕草子」の影響があり、又

とよらの寺の法師原
そりたる鬢なはやしそ
草かる男駒とめて
そのそりくひにつなかむ

これは「萬葉巻十六」の歌に基いたものであろう。

屋戸の籬の穫の
露の消ぬるを待かほに
あはれ胡蝶の朝るして
誰身となれる夢や見る

これなどは誰しも「荘子」を想起することであろうし、又、例の

嶺の嵐か松風か
尋ぬる人の琴の音か
こまをひかへて聞ほとに
つまおとしるき想夫憐

は、其の出典「平家物語」であること周知の通りである。而してその一首に

武士よく聞け
しゝふしんこらんにう
もみちかさねや八重霞
しはしかほともおこたるな

といふのがある。此の一首、何の事かわからぬ。我々凡俗、わからぬが道理。「しゝふしんこらんにう」は「獅子浮沈虎乱入」で、「もみちかさねや八重霞」と合せて真影流剣法極意の術語であるとは解説に於て翁の玄孫滝三郎氏の明らかにされるところである。これは

うち死してこそ武士と
いふ名は残せ活る身の
あらん限はたけしとも
ほこるなものゝふものゝふ

の一首と合せて見る時、一は剣道撃突の達人極意の域に達しても懈怠あるを戒め、同時に、武士たるもの、傲慢不遜の態度の慎しむべきを詠っているのであって、これを、翁の風韻雅味と合せて考えれば、その姿、まさに枯淡厳正雅韻颯々たる古武士の典型と称すべきであろう。而してそれは、ただ単なる古武士の姿のみに止まったのではなくして、真に日本的な自覚を具足したところの古武士の姿であった。先に触れたように、翁は、大楠公奮戦の図を描いて次の一首を副えた。

きよき流をともとして
さけるや山路の菊の花
えならぬいろかは山水の
なかれとゝもにたえせし

これは異本によれば「金剛山」なる題のもとに収められている様であるが、いずれにしろ楠公の菊水流芳を詠んだものに違いはない。又、児島高徳公を描いては

やま桜木にかきおきし
児島のぬしか言の葉や
来る春ことに咲き匂ふ
はなにたくひて憐なり

の今様一首を副えているのであって、翁に見るべき点、尠しとしないが、その本質、精神は、実にここにありと言わなければならないであろう。

翁に関しては、すでに本書序言に幡掛正浩氏の述べられた通りである。また翁の門人庄村氏の描ける翁の肖像及び題賛こそは、幡掛氏の、貧居高士の像として類画中の秀逸なるものであろう、の賛辞を欺かず、二川相近翁の面目をその風韻とともに伝えていると言うも過言ではあるまい。すなはち、その賛に

国風文雅　古今絶倫
臨池七十　自若居貧

とあるによっても知られよう。

（福岡県若松市蛋住　兄弟文庫発行
（責任者）　相良順之助）

投稿歓迎！

台風一過、穏やかな秋の日射しがさんさんと降りそそいでまことによい季節となりました。風流人ならずとも何か出そうなところ、仕事に追われて忙しい方、書いた事がないから億劫でなどといわず、「宗像」の為に投稿して下さい。内容や紙数の制限は申しません。自分の書いたものをこの紙上に残しておかれることが何かの記念にもなると思いますがいかがでしょう。

特に指名依頼はいたしませんから、この欄をごらんになった志ある方々の投稿をお待ちいたします。　（編集部）

宗像神社史編纂余話

昭和三十六年十月七日付の神社新報の第四面に新刊紹介と題して「宗像神社史上巻」のことが出ている。

「附編（年表・索引）を含む三巻のうちの上巻、中略 堂々たる出版であり、斯界空前の大著といって過言ではない。元官幣大社宗像神社の由緒と歴史とがまことに考証精博に、而して懇切詳密に記述編纂されてをり、神社界はいうに及ばず学界に裨益するところ決して少くはあるまい。後略」

「斯界空前の大著」と最大の賛辞をおくっている。

この大著の下巻以下出版の為の調査は現在続行中であるが、上巻刊行によってこのような反響を呼んだことは偶然ではない。神社新報に云うように「考証精博」「懇切詳密」を極めていて、この点学術書としては第一級のものであること論を俟たない。

宗像神社復興期成会長出光佐三氏の熱意もさることながら、このかげに黙々として編纂作業を続けられた幾多の関係学者のいることを見逃してはならない。

十月六日から一週間、編纂委員長である小島鉦作先生（成蹊大学教授）と全委員である梅田義彦先生（文部事務官）とが続刊の資料調査の為に来社せられた。これを機会に両先生に神社史編纂の心構えといったものをお尋ねしてみた以下は両先生のお話しされたことを要約したものである。

「宗像神社史編纂のための資料は、他社の例に較べて厖大なるものがある。此の点、飽く迄も資料によって学問的研究的に我々の仕事を押し進める上に非常に幸いしておる訳です。そして本神社史を現代歴史学の水準に則ったものにしたいと念願しております。文献遺物、遺跡に基づいて実証主義をモットーとして、どこ迄も客観的具体的に編纂することを目途としており、たとえ信仰上のことであろうとも、事実を歪曲したりは絶対にしませんし、また出来ないことです。これが結果に於て自然に神徳の宣揚の一助ともなるならば私共の努力の甲斐もあろうというものです。本書の完成によって百年・千年後の学者に研究の成果と資料とを提供し得るならばこれ亦望外の喜びです。ただ、調査研究の完璧を期したいとは思っても、なお何処にどのような史料が存するかも知れず、これが神社史の瑕瑾となるかもしれませんから、難かしい問題だと思っております」

写真左より梅田・小島先生

「百年・千年後の学者の研究に資するため」不断の研究継続が望ましい、と語られた両先生の気魄に打たれた。まことに、来社以来山積した古文書、記録類と取組んで、食事等の時の他は早朝から夜更けまで勉強を続けられる先生方のお姿には唯々頭の下がる思いであった。

秋色漸く濃い田島の屏風山と多礼山を遠望して何か話し合っておられる両先生の姿は穏やかだが、あの内心は学問の鬼といってよい程の意慾に燃えているのであろうと痛感した。もしそんなことを先生たちにお話したら、てれ臭そうに苦笑されるであろうか。